



Natsuki Hosoda

蕪崎市在住、8/1で17歳になる日本航空高等学校の2年生。父・昌美さん、母・恵子さん、姉・歩さんの全員夏生まれの仲良し家族。ハクタカマリソ所属のウエイクボーダー。日本屈指のトップアマチュア。



ハクタカマリソ代表、高村哲司さん



2019 JWBA 地区大会 SUPER MEN 決勝3位



▲気心知れた仲間たちと

▼快進撃は家族の支えがあってこそ



## 巻頭特集

### ウエイクボード界の寵児

# 細田夏輝

Natsuki Hosoda

1980年代から90年代にかけて北米地域で発展確立されていった「ウエイクボード」は、ある日本人によって持ち帰られ、一部の人の間で普及していった。ボードに立ち、モーターボート等につけたロープを持って引っ張ってもらい、水面を滑るウォータースポーツであるウエイクボード。その魅力にハマってしまった一人の少年の話である。



### 風を切り、水面を自在に操る ウエイクボードの世界にハマる

細田夏輝くん。まだあどけなさが残る高校生である。どこにでもいるような、元気で今どきな夏輝くんは、週末になると山中湖で華麗な技を魅せる。ウエイクボードのアマチュアでは右に出る者はいないと言われていて、日本トップクラスのウエイクボーダーなのだ。2018年最終戦で優勝し文部科学大臣賞受賞の経歴も持つ。

きっかけは小学4年生のとき。父・昌美さんが「船を買ったから」と湖に遊びに行き、たまたまあったウエイクボードに乗せたところ2回目で立ってしまったそうだ。「楽しかったー!」そのときのことを夏輝くんは今でも鮮明に覚えている。そして、「ウエイクボードをやってみよう」と思うようになったと語る。本格的にやり始めたのはそれから2年後の小学6年生のとき。ハクタカマリソの高村哲司さんに師事した。「ハクタカマリソ」は、山中湖で

### 「楽し〜!!」それだけでここまで来た これからはもっと上を目指す

早朝6時頃から湖に姿を現すと、入念なストレッチを始める。身体をしつかりとほぐし、あたためたら、まず1本滑る。1本あたり15分。一般的に15分と聞くと短いと思うが、時速25〜35kmで水上を滑走するボートから伸びるロープを掴み、ボートの起こした激しい波を利用して技を決め続けるのは、想像以上に体力を、そして精神力を消耗させる。大会で優勝してきた彼でも15分が一杯だという。むしろ「モチベーションが上がらないときは長すぎると感じます。1本滑ったあとは手や足もブルブル震えています」と、10代の若者ですら体力のいるスポーツなのである。それでもやり続けられているのは、同じ世代の仲間がいつも一緒にいるのも大きい。

取材当日に一緒に滑っていた、高村さんの息子さんで、最年少の小学6年生でプロになった泰嘉(たいが)くん(16歳)、同じくプロとして活躍する井上航平くん(19歳)。そして、やはりプロの豊泉和馬くん(18歳)とは何年も一緒に釜の飯を食べてきた仲間であり、ライバルである。「彼らと仲良く楽しみながら競ってきたから、ここまで皆やってこられたと思う。独りだったら続かなかったかもしれない」と話す高村さん。そしてもう一つの理由に「滑っているときの風が好きだから」という。技をキメられたときの感動は言葉では言い表せないとも。



2018年 最終戦耶馬溪大会 優勝 文部科学大臣賞受賞

最も長い歴史を持つマリンスポーツクラブで、代表である高村さんはウエイクボード界の中では有名。ウエイクボードを日本に広めた一人であり、山中湖にマリンスポーツとして持ち込んだ先駆者で、プロウエイクボーダーの育成に力を入れ数々のプロ選手も輩出した人物だ。その高村さんに「センスがいい」と言わしめているのが、この夏輝くんなのである。

高村さんの指導を受けるため、小学6年生だった夏輝くんのウエイクボード漬けの日々が始まった。毎週金曜日、学校が終わると母・恵子さんの運転で山中湖に向かい、日曜日に迎えがくるまで山中湖に2泊する生活スタイルは、今も変わらず続いている。変わったことと言えば「今は行きも帰りも電車やバスを使って、自分で通っています」と、母の手を煩わせていないことだ。特に夏休みになると行きたがり。むしろ「帰りたくない」と言っているのが早かったのは、山中湖に行っている間は、洗濯などの身の回りのことは自分でやっているようです」と、ウエイクボードを通して成長する息子に笑顔を見せた。

昨今のコロナ禍で山中湖も一時は閉鎖。予定していた大会も軒並み中止になっていったが、10月に開催予定で出場が決まっている日本選手権に向け、今は練習に励み入賞しプロを目指す。入賞すればプロの夢も見えてくる。

海外にも何度も渡っている夏輝くん。「海外遠征でアメリカに行ったとき、外国のプロはすごいって感じました。レベルが違う!世界の壁を実感したし、あんな風になりたい」と触発もされて良い経験ができました。」と、もうすでに舞台に立ち始め、度胸も据わっている。

「人として男として、早く一人前になれ」と鼓舞する父と、「楽しんで、自分の思う道を歩んでほしい」と温かく見守る母と、「シャッキとね」と一番身近な理解者である姉、そして「自身をコントロールすることが課題」と叱咤激励する高村さん。応援してくれる人たちの思いを胸にして、さらなる高みを目指す。

「僕が初めてウエイクボードに乗ったときの感動を、今度は僕が多くの人に与えたい。そして今までウエイクボードをやっていたら、両親だったり指導して下さる高村さんだったり、仲間だったり、周りの力があってからこそ。この競技をもっと広げるためにプロになります。だって楽しいから!」

